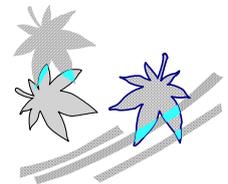


目次

教員夏季コンピュータ研修報告(3頁) 「脳の研究」最新情報(2頁)
看護指導者セミナー報告(9頁) 時評:学校が育てているもの(10頁)

巻頭 寸言

最新の人材開発技法の展開と 土着的民俗的慣習との融合



能力開発工学センター理事 奥田 健二

1. 「不易流行」

不易流行という言葉がある。伝統的なものを尊重し伝統を活かす生き方と、革新的なもの・それゆえに時代の最先端を行く流行に敏感に反応し自らを変えていく生き方との融合が大切だとする主張である。このように相互に矛盾するものを両立・併存させる生き方は、「絶対矛盾の自己同一」という思想を持つ私ども日本人にふさわしい生き方だということができるだろう。

ここで土着的民俗的慣習の中で、現在も私どもの身近に活かされているものについて考えてみよう。それは、仏教における念仏講などの各種の小集団活動であり、この講組織は中世近世を通じて長い歴史を持ってきたものである。あるいは江戸期において主として農村地帯において盛んに活動した若者組と名付けられた小集団活動も注目される。講や若者組は、幕府や大名などの上からの命令・干渉によって作られたものではなく、農民や若者たちによって自発的に結成されたものであった点が重要である。

たとえば浄土真宗においては、「少人数の門徒の結衆」が奨励されていたのであり、少人数の平信徒同士が日常生活の場においてお互いに励まし合い自己陶冶することの意味が重視されていた。上からの命令によるフォーマルな組織ではなく、自発的な小集団のなかで、仲間同士の平等な立場で、共に念仏を唱えたり、教義についての不明な点について質問し合ったりすることによって、真宗の教えが自然と浸透することが計られたのである。この念仏講では和讃を詠ったり、また酒を飲んだり、娯楽的な性格も果たしていた。いずれにせよ、講を通じて人々は心の活力を取り戻したのであり、日常の厳しい仕事に耐える力を取り戻したのであった。若者組もまた同じような機能を持っていたのである。

優れた人材開発計画の中には、以上に述べた講や若者組などの作用が巧みに活かされているように筆者には思えるのである。

2. 技術的知識的教育だけでなく、例えば合宿訓練をも平行的に進め、受講生同士が自由に話し合いを行う時間を持てるよう配慮することが賢明な方法である

さて、E製作所の事例について考えてみよう。同製作所はコンプレッサーメーカーとして高い技術力を誇り業績を上げてきていたが、従来のハード面重視の経営政策からプラントエンジニアリングあるいはコンサルテーション等のソフト面を中心とする企業に構造転換することを決定し、そのため多

発行者 財団法人能力開発工学センター (JADEC)

〒203-0042 東京都東久留米市八幡町 1-1-12 / TEL:0424-73-1261 / FAX:0424-73-1226

E-mail: info@jadec.or.jp ホームページ: <http://www.jadec.or.jp/>

[本誌はJADECセミナー卒業生の会「ほんものの教育を考える会(ADE研究会)」の支援により発行しています]

数の製造部門の要員を新規のソフト部門に職種転換するための再教育計画を精力的に実施していた。

筆者が拝見した訓練計画自体は最新の人材開発技法を十分に採り入れた優れたものだということが良く理解できた。

ところが教育技法の上では大変優れた計画であったにもかかわらず、所期の成果がなかなか得られなかったというのである。その理由は受講者たちが、なぜ自分が職種転換者として選ばれたのか心情的に納得できず、従って心の底にわだかまっていた不満や疑問を解消できず、そのため教育に集中できなかったからだったというのである。

そのことに気づいた教育担当者は、早速教育計画を修正し、教育期間中は全受講生に合宿してもらうこととし、夜間に受講生同士が自由に話し合う時間を設けることにしたのである。受講生たちは全く平等なそして自由な立場で、悩み事やさまざまな不安について、包み隠さず話し合うことを通じて、職務配転の必要性を心情的にも納得することが出来るようになり、その後は研修に打ち込むようになったというのである。この合宿方式により、講とか寄り合いの場での平等且つ自由な話し合いを通じて、生活者としての活力を取り戻すという古くからの日本農村のしきたりが活かされたのだとしてよいだろう。

3. 新しいものと古くからのものとの融合・共生を計ることが賢明な生き方である

考えてみると、統計的品質管理方式の浸透に成功した日本企業は、この古いものと新しいものとの融合・共生に成功したからだといってよいだろう。たとえば管理の七つ道具についての教育は、新しい合理的なものの見方についての普及活動であった。一方、QCサークル活動は、日本の伝統の講とか若者組という小集団活動の復活であった。そこには明らかに、新しいものと古いものとの巧みな融合が見られるのである。それは「絶対矛盾の自己同一」という日本人の心底を流れる思想にマッチする工夫なのであったのであり、それ故に大きな効果をもたらしたのであった。

ただし、TQCというような形で、上からのフォーマルな制度として取り込まれてしまい、働く人々の自発性が否定された時点以降、日本の品質管理活動は形骸化し、活気を失ってしまうこととなったのである。残念なことと言う以外にない。
(アジア経営研究所所長)

「脳の研究」最新情報

国家的研究プロジェクトとして推進されている脳研究の二大プロジェクトが、このほど相次いで研究発表シンポジウムを行った。「脳の世紀」実行委員会代表の伊藤正男氏(理化学研究所)が「これからは教育に生きるような研究を進めたい」との展望を語った。教育研究の立場からも関心を持ち、積極的な交流を計るようになって行きたいものである。以下に発表テーマを紹介する。
《小澤》

第9回「脳の世紀」シンポジウム(2001年9月7日、有楽町朝日ホール)

脳と心の進化 澤口 俊之(北海道大学) 秩序だった神経ネットワークを生み出す分子メカニズム 藤澤 肇(名古屋大学) 特別講演 - 生命誌からみた脳 中村 桂子(JT生命誌研究館) エンターテインメントロボットにおける知能とは 藤田 雅博(ソニーデジタルクリーチャーズラボラトリー) 神経変性疾患の分子病態機序と治療開発への展望 辻 省次(新潟大学) 詳細は <http://www.kuba.co.jp/>

シンポジウム「脳とシステム」JST第5回基礎研究報告会(2001年10月24日、草月ホール)

脳を創ることによって脳を知る 川人 光男(川人学習動態脳プロジェクト) 人間の「耳」と機械の「耳」 - 「空耳」が明かす聴覚の秘密 - 河原 英紀(和歌山大学) コンピュータは「ひらめく」か? - 脳のモデルの視点から - 金道 敏樹(松下電器産業先端技術研究所) こころとからだの接点 - ロボティクスからのアプローチ - 中村 仁彦(東京大学) 心の起源を求めて - 赤ちゃん研究とロボット研究 - 関 一夫(東京大学) 心が通う身体的コミュニケーション技術 渡辺 富夫(岡山県立大学) ヒューマノイドにおける認知と行動 北野 宏明(ソニーコンピュータサイエンス研究所) 詳細は <http://www.jst.go.jp/>

ネットワーク技術を活用する力を育てるには

- 水海道市「夏季教員研修」を終えて

< 編集部 >

当センターでは、茨城県水海道市が毎年夏季休暇を利用して実施する“教員向けコンピュータ研修”に協力している。今年は16年目になる。昨年からはこの研修のカリキュラム、教材づくりから学習指導までの全体を能開センターが引き受けると共に、教員が日常活動を通じてネットワーク技術を習得できるような環境づくりなど、1年を通じてのサポートも行っている。

今年も7月末から8月始めにかけて「夏季教員研修」が行われ、このほど水海道市の教育委員会及び教育研究会への報告も終了した。この機会に、研修を実践したスタッフの皆さんに、研修を通じてスタッフが実感した学校の改善点、特に文部科学省が昨年からは積極的に進めている学校情報化についての問題点なども含めて語ってもらった。

出席者：

矢口哲郎（能力開発工学センター研究開発部長）全体企画・運営、上級指導

白尾彰浩（ヒューマンホットプランニング代表、J A D E Cインストラクター）初級指導

叶内盈子（能力開発工学センター主任研究員）初級指導

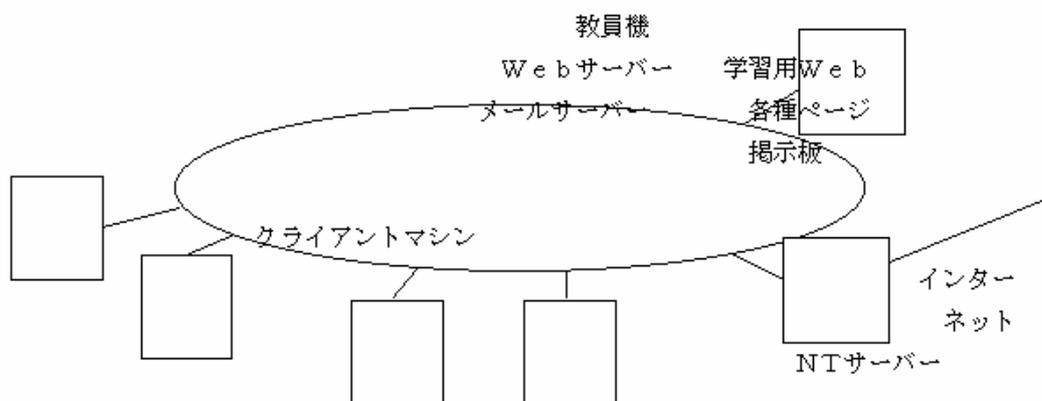
小池いづみ（アクティエンタープライズ代表、J A D E Cインストラクター）中級指導

きき手・文責：小澤秀子（能力開発工学センター事務局長）

1. ネットワーク技術、何をどのように育てるのか

- まず、今年の研修を総括してください。

矢口：昨年同様、まず、学習環境として図のようなイントラネットを準備して、ネットワークを気軽に使えるような条件を設定した。



研修用イントラネット

研修の様子

初級研修（3日間18時間）

- ・受講者：中学校教諭 4名、小学校教諭 11名、内管理職 2名
- ・インストラクター：主1名、副3名



二人でグループ、パソコンは一人1台
二人の間のテーブルにテキスト



テキストを読んで、話し合っ、やってみる
わからないときはインストラクターに聞く

中級研修（2日間12時間）

- ・受講者：中学校教諭 6名、小学校教諭 16名、内管理職 1名
- ・インストラクター：主1名、副2名、ヘルパー 2～3名



上級研修（2日間12時間）

- ・受講者：中学校教諭 3名、小学教諭 9名、内管理職 3名
- ・インストラクター：主1名、ヘルパー 1名



去年に比べて今回は、かなり先生方のニーズに合った形でやれたと思う。年1回の七夕研修で学ぶだけでは限界がある。日常的に生かしていくには、どうしても継続的なサポートというか、フォローが必要だ。そう考えて去年から日常のサポートを始めたわけだが、その結果、研修の内容も去年から比べれば一段進められたし、今後何をどうやって行けばいいかという方向性もはっきりした。

- では各コース毎に具体的に話してください。

(1) 初級研修 - プログラムテキストでじっくり取り組んでもらった

白尾: 初級はスタートラインが設定しやすい。文書作成や電子メールなどのごく基本の操作を通じて、メモリやファイルなどのイメージがつかめるような内容を準備した。

去年も受けて2回目という人もいるけど、日常であまり使ってないという人たちだから、ほとんどの人にはこちらで想定した内容がぴったり合ったと思う。受講者は15名で、2人一組でマイペースでやってもらった。指導もし易く、全体として落ち着いて学習を進めてもらうことができた。

叶内: プログラムテキストがよかったと思う。受講者の感想にも「繰り返し練習できる」「自分のペースでやれる」「自分でまずやってみる」などの理由でプログラムテキストがよかったという人が多い。「テキストに励まされた」「テキストをまとめてくれた人に感謝したい気持ちでいっぱい」という感想もあった。

白尾: でも中には最後までこの学習方法にのれない、という人もいた。声がなかなか出ないで、思考が展開していない様子だった。

叶内: 自分でやってみたことが勉強なんだけれど、そうではなく、どうしても端から覚えなければいけないと考えている人がいた。覚えようとする姿勢が切り替わらなかった。でも一人だけですよ。あとは全員楽しんでいたようだ。特に初めてメールをやりとりしたことの感激が大きいようだった。新しい世界に触れたという感動を持ったようだ。

白尾: 大部分の人は、第一段階をクリアして、次は学級新聞やレポートとかといった実際の仕事に生かすようなことをやりたい、或いはメールをもっとどんどんやってみたいというような希望が多かった。これは中級の内容になるわけだけど、来年も「初級」或いは「初級と中級の間」で研修したいという意識。まだ自信はないということだが、自信は日常の利用、活用がなければ生まれないだろう。日常サポートでカバーしていくことと合わせて、中級の内容を改めて考える必要があるだろう。

(2) 中級研修 - 基本はしっかりつかむように、多様な希望には個別対応で応えた

小池: 受講者の経験には幅があったし、希望もまちまちだったが、パソコンには慣れているようで、みんな主体的にどんどんやる、という状況だった。

ただ自己流でやっているわけで、それをきちんとやってもらうことに重点をおいた。ウィンドウ操作、フォルダ作成・保存、ファイルの管理などの Windows の基本操作や表計算 (Excel) の基礎については全員一緒にしっかり学習してもらった。ソフトをインストールすると言っても、何をどうやっているのか、どこに入ったのか、というようなイメージがない。プログラムとデータの違いもあやしいという場合もある。それをしっかり押さえた。

一方、三分の一ぐらいの時間は、自由時間として、各自の課題に取り組んでもらって、指導陣が個別に指導した。この時にはかなり細かい点まで対応できて、この時間を持てたことで受講者の満足度も高くなったと思われる。

ただ、一太郎を使っている人にも、今回全員ワードを使ってもらったわけだが、本当にワードのよさが伝わったかという点、不安がある。データを共有する、ということに発展させることをねらったわけだが。

矢口：それは、共同で何かをする、という考え方がピンとこないのではないか。特に小学校の場合はクラスごとに先生が独立して見ているから、共同の必要がない。情報を共有する必要性が小さい。中学校には、生徒名簿など共有の必要があるが。だから小学校の場合はよほどその目標を明確に示さないといけない。

小池：今回その点は不十分だったかも知れない。それに受講者のレディネスのばらつきからして、一括で「中級」とするには無理がある。今後は中級の内容をさらに分ける必要がありそうだ。

(3) 上級研修 - 学校業務での活用をめざして

矢口：上級は、ネットワークを学校で日常的に活用していくためのリーダーを育てようということで、ネットワークの便利さを実感してもらい、技術をマスターしてもらうことを目標にした。そのための教材として階層的ファイルを一太郎とワードの両方で準備して使ってもらった。同じ形式で、どちらでもいいように。その辺は手間を惜しまずに（笑）

結果として、こちらの意図はよく伝わったと思う。今回はほんのちょっとしか出来なかったが、これをもっと充実させてやっていければいい。それは日常サポートでやることになるわけだけど、とにかく学校の日常でネットワークすることで便利だなと感じられることを見つけてその一部を研修で体験する、構造をはっきりつかむ、ということが大事じゃないか、と思っている。

小池：ファイルの識別など、やればやるほどなかなか複雑なことが増えてくる。きちっと使いこなしていくには道が遠い。うろろろすることになる。そういうことについて基礎となることを選び分けて研修できちっとやり、後は日常で使いながらマスターしていく、ということですね。仲間で研究しながらやるのが大事だ。なんでもかんでも研修でやるというわけにはいかないですから。

矢口：受講者の感想でも、職員室でプリンタ共有、ファイル共有など実務で利用することに関心が集まっている。やはり、職員室ネットワークの実現が急務だと思う。ホームページ開設については、時間的余裕がないということもあり、それほど積極的ではない。業務の改善に必要なところ、便利さが実感できるところ、から進めるのが自然だと思う。その方向で日常サポートを強化したい。

2 . 学校の情報化をめぐる問題点

- 学校の情報化を進める上で問題になっていることに話題を広げていただきたい。

(1) 情報化は体質改善とのリンクなしには成り立たない

矢口：驚いたのは、いまだに学校ごとに毎日教育委員会に文書を取りに行くというようなことをやっている。学校毎の棚があって、そこに学校宛の文書を入れるようになっている。それを取ってきて、校長が見て判を押して回覧する。メールで一斉に送れば、ほとんど瞬時にできることが、

3日も4日もかかるというようなことがある。

白尾：とにかく学校全体として進めることが必要。これまでは個人的な利用だったのを学校業務を情報化するのだという考え方、これが必要だ。

ぼくがサポートしている別の小学校でも、これまでに数回行っていろいろ聞いてみるけれど、何をやりたいのか具体的なイメージがまだよくつかめない。あるにはあるようだが、全学年を通して何か共通のものというのがはっきりしない。

矢口：そういうことになると、学校全体のことを押さえている人でなければ考えられない。コンピュータがわかる、というだけでは考えられない。本来は校長とか教頭といった全体を見渡している管理職が学校の情報の流れを見て、考えるということになるのだが、その辺の人々はコンピュータ技術に精通しているわけではない。だから、ネットワークの利用というようなことを思いつかない。そこに新しい体制が必要になる。

根本的には学校が変わる、ということだ。これまで個人でばらばらやっていたことを、情報技術を活用して全体で共同してやる、ということへの体質転換。企業ではもう20年以上前にコンピュータの導入に合わせて、仕事のシステム転換が盛んに行われた。仕事の改善を進めたわけで、今それを学校でも考えないといけないということではないか。

白尾：校務そのものを整理して、例えばフォルダーの分け方にしても設計しないとけない。教育委員会の仕事も含めて学校業務全体のやり方を見直す必要があるようだ。

(2) 強力なリーダーシップと協力、サポートが必要

白尾：私がサポートしている小学校の場合は、中核になっている先生はできる先生なんだけれど、その先生の話が他の先生になかなか通じない。今の先生方は、少なくともワープロは使っている。ワープロも使ってない、という人は、28人中1人くらい。

ところが、ワープロ派とパソコン派でちょっと通じが悪い。また、ワープロソフトも一太郎とワードが半々くらいで、そこで勢力争いがある。リーダーがワードだからといって、強引にワードに変えるのは抵抗がある。

小池：そういう細かい問題はいろいろある。情報化によって学校のデータ管理などがやりやすくなる、というような明るい未来が見えてくれば苦勞もいとわない、ということになるのではないか。共同して作るという状況を作らないとだめだ。

矢口：そういう問題も結局リーダーシップに関わってくる。リーダーがはっきり何をやるか、先の見通しを含めてみんなの理解を得ようリードしていく、個人で使っている間は好きなやり方でいいが、学校全体で使うということになれば、当然そういうリーダーシップが求められる。

(3) 新しい体制が必要、そのモデルを作りたい

白尾：それを管理職に求めることには無理があるのではないか。管理職の仕事は多忙を極めていいる。特に小学校がひどい。余裕がない。ほとんどが担任をもっているから、その他のことはみんな管理職がやることになる。大変だ。そういうところでIT化も進めるなど不可能に近い。

叶内：管理職の方も自分でパソコンを買ったり、とにかく使っていく必要はある。否応なくそういう状況になっているのは間違いないし、必要も自覚している。しかし、それを勉強する時間が無い。

矢口：手助けなり、サポートなりがどうしても必要だ。まず、中堅教師で技術にも詳しい人。しか

しこういう教師がまたまた忙しい。私もこの4月から連絡するが、電話で相談することも難しい。メールを使う環境を作りたいのだが、その相談ができない。

白尾：外部からの協力をとということで、文部科学省が教育情報化コーディネーターというのを設けて、その資格制度もできているが、どうもまだあまり機能していないようだ。

矢口：単に情報技術があるだけでは、学校の情報化を助けることはできないだろう。学校の事情をつかんでそれに基づいた設計ができる人でなければ無理。

小池：今回の研修に校長先生も参加されていてなかなか積極的だった。しかし、管理職とそれをサポートするスタッフだけ集めて特別コースを設けることも必要かも知れませんね。他の先生の生かし方なども含めて。

矢口：研修も今は先生個人の力をつけることが目標になっている。学校としてどうしていくか、という考えがない。職員室で使うための研修ではなくて、それぞれ授業で生かしてください、ということになっている。この考え方では限界がある。

学校全体の目標を出してこななければいけない。中学校では少しその方向に向いてきているが、まだ明確ではない。非常に得意な先生がいる学校では、ネットワークも使われ始めているが、それも学校としてのはっきりした目標があるという形ではない。やりたい人が勝手にやっている、という状況だ。

白尾：それを日常サポート活動を通じて、我々も一緒になって明確にしていくことがこれからの課題だと思う。

矢口：そう、具体的なモデルを出していけるといい。

- 期待しています。今日はありがとうございました。

>>>>> 米軍のアフガニスタン攻撃について - 編集後記にかえて <<<<<

「怨みに報いるに怨みをもってすれば、怨み尽きることなし」(作家 瀬戸内寂聴、毎日新聞「余禄」より、停止を願って10月26日から3日間の断食を行う)

「報復しないのが真の勇氣」(ニューヨーク在住の音楽家 坂本龍一、朝日新聞「私の視点」より、攻撃に反対する署名活動HPで全世界に呼びかける)

「アフガン難民の人々の祖国帰還の夢を実現させるために、私たちに何ができるのか考えていきたい」(今年パキスタンでアフガニスタン支援活動に参加したNGO職員 小荒井理恵 - 能開センター評議員小荒井順氏の娘さん、朝日新聞「声」欄より)

「家もない、食べるものもない、あるのは山だけ」(アフガン難民の老人、NHKニュースより)

「テロは悪のイデオロギーであり、大衆を動かしているのはわずかな指導者。宗教戦争にすることなく、温床となる貧困をなくす必要がある」(フィリピンのアロヨ大統領、「東アジア経済サミット」での講演より)

親を失い兄弟を失い、自らも傷つき放心する幼い子供たち、この現実になすすべのない無力感、同じ思いをお持ちの方も多いでしょう。つらくても目を背けずしっかり見つめること、一部始終を見逃さないように目を開き続けること、これが今を生きる目撃者のまずはなすべき責任かと思えます。(お)

【セミナー報告】

看護技術指導者のためのセミナー

高山赤十字看護専門学校（岐阜県） 8月11日 教員及び臨床指導者 29名
都立豊島看護専門学校（東京都） 8月21日 " 35名

内容の基本構成は右表の通り。メンバー構成やレイネスが違うので、材料は異なる。以下は豊島の例。

1は、まだ教育の大半を占めている講義による教育からの方向転換の必要性を理解してもらうためのもの。2,3の学習への導入なので、材料選びには毎回苦労する。豊島では「イチローはなぜたくさんのヒットを打てるのか」という内容で展開してみた。

ヒットを打つためには、まず投手の投げたボールにバットをあてることができなければならない。イチローは三振が少なく極めて打数が多い。それだけボールにバットをあてているということである。では、ボールにバットをあてるという行動は、どうしたら成立するのか。ピッチャーの手から離れたボール（時速 150 - 160 km）がキャッチャーミットに収まるまでの時間は0.5秒だという。その間に、彼の脳と身体でやっていることを分析してみる。

ボールのスピードを追うことのできる目の動き、投球行動と手から離れたボールの動きから、球すじと手元に来るタイミングの予測、そして予測したタイミング、通過点にバットを合わせる身体の動きなど。しかし、このことを知っても、できるようにはならない。実際にそのスピードのボール、さまざまな投球フォームとさまざまな球種に対決させて、目と脳と身体とを働かせなければ、できるようにはならない。それも、無計画でいきあたりばったりの練習ではダメである。それぞれの要素毎に計画的に鍛え、そして総合するという行動の積み重ねが必要なのである。つまり、「知る」ではなくて、いかにその行動を成立させるための「脳 身体」を働かせるか、「いかに行動を積み重ねるか」が行動能力を育てることになる。

このイチローの話題は、受講生の姿勢を学習内容の方にくっ近づけた。学習者自身が興味を持っている問題であり、それが自分の学習することと関係があるのかと、自分の問題としてとらえられたということなのだろう。学習内容をいかに学習者自身の問題とするかが、学習の場づくりの上で重要な問題だと、改めて思わされた。

右の「指示と指導」は、3の「行動形成(学習)を考える」の課題の一つ。A（指導者） B（学習者）の行動を分析して、Bができていないことは何か、できるようにするには何をさせる必要があるか、またそのことに意欲を持たせるにはどうしたらよいかを考える。Aの指導は、どこに問題があるかを考える、というものである。（豊島の受講生たちはこの課題すべてをクリアした。）

〔追記〕 高山は昨年に続いて2回目。この考え方を土台に、臨床実習において生徒を主体的に活動させる学習を大胆に展開しており、学習者のその活動ぶりは大変生き生きと、かつレベルも格段にアップしているとの話をうかがい、大変嬉しく思った。（看護教育研究班）

- | | |
|----|--|
| 1. | 「行動」が行動能力を育てる |
| 2. | 「演習」 人間行動の見方
料理行動の例で（高山）
リンゴの皮をむく行動の例で（豊島） |
| 3. | 「演習」 行動形成（学習）を考える
・教えるのではなく、行動を通じて悟らせる |

指示と指導

高校の新聞部で
A．川口(新聞部部長、3年)
B．山本(新入部員、1年)

NO	人	表現行動
1	A B	この記事だけだな。 ハイ
2	A B	(写真を指さして) ここだよ、こんな写真しかないのか？ いえ、まだ他にもありますが...
3	A B	迫力がないんだよ。 もっと動きのあるのがあったろう。 (首をかしげる)
4	A B	持ってこいよ。 ハイ！(写真のファイルを持ってくる)
5	A B	これだな。大きく焼いてこの部分だけ使え。 ハイ！
6	A B	それから、ここな。 表現がまずいんだよ。言いたいことがぼやけてるんだよ。 書き直しといたからな。 ハイ。
7	A B	あとはいいから。 直したらすぐ印刷にかかれよ。 ハイ。

学校が育てているもの 同時多発テロ事件への対応に思う

能力開発工学センター主任研究員 矢口 みどり

「数学の授業中にね、私たちこんなふうになんか問題解いているだけでいいのかなって思っちゃった。」 同時多発テロ発生から2, 3日たった夕食のとき、高校1年の娘がそう言った。

同時多発テロと、その後のアメリカの対応、日本政府の対応は、言葉には言い表しがたい衝撃と怒りと疑問と不安の渦の中に私たちを巻き込んだ。「どうしてこんなひどいことを」「なぜアメリカに」「報復は正義か」「日本は報復の支援をして良いのか」「日本も戦争に巻き込まれるのか」、どう考えたら良いのか、どんどん進行していく事態に何もしないでいいのか。娘の言葉は、そうした居ても立ってもいられぬ思いの表れである。恐らく、日本中の大多数の子供たちがそうした状況にあったのではないか。

私が問題にしたいのは、こうした不安と疑問と混乱の中にいる子供たちに対して、学校はどう対応すべきかということである。

中学2年の息子のクラスでは、テロ発生の翌日、国語の担当教師が「いやあ、大変なことが起きちゃったねえ」と言って、彼が事件から受けた思いを授業の中に1分ばかり述べたのが、1か月半を経過した今日までの唯一の対応であった。何回かあった朝礼や学年での集まりでもこの問題には何も触れられなかった。10月中旬の保護者会でそのことを話題にした私に、息子の担任教師は、「問題が難しすぎる」「結論が出ない」それに「第一忙しくてやってられない」「数学の時間を割いてやるって問題でもないでしょう」と答えたのである。

私は何も「問題のすべてをわからせてほしい」などと言っているのではない。そんな簡単な問題でないことは重々承知だ。まず、子供たちがどんなショックを受けているか、それを聞いてやって欲しい。どんな不安を持っているか、どんな疑問を持っているか、どんなことを考えているかを聞いて、それを受けとめてやって欲しいと言っているのである。そして、こうした問題に対して、どういう姿勢で立ち向かうかを指導してもらいたいのである。

現実の問題は、たいていがむずかしい、そして結論はわかっていないのである。そうした問題、目の前で起きている問題について、子供たちが子供たちなりに調べ考え、子供なりに出来ることはないかと考えて行動していく、そのヒントを出してやって欲しいと言っているのである。

息子たちは、昨年総合的学習として「国際理解」というテーマに取り組み、各国の料理や音楽の違いなどについて調べ発表した。「国際理解」という問題をそこで終わらせないでほしいのである。今度の多発テロ事件は、まさに国際理解の問題なのである。国際理解というものは生やさしいことではない、ということを知るだけでも意味がある。民族、国家、宗教、産業と経済、国と国の関係、そしてそのそれぞれの歴史などさまざまなことをとらえる必要がある、ということがわかるだけでも意味がある。それらをとらえて、共に歩む道を見つけていくことが自分たちのこれからの課題だ、とつかめるように手助けしてやって欲しいのである。それは、学校で歴史や地理や経済、政治、そして言葉などを学ぶ意味をつかむことにもなる。

「暇がない」「答がない」「むずかしすぎる」として、目の前の現実の問題、しかも子供たちが大いに関心を寄せている問題から目をそらして、進学準備のための勉強だけをやらせるとしたら、それは、問題を先送りし、自分には関係ないと人任せにする人間をつくり、自分の身に火の粉が降りかかってきたらあわてて対策を考えたり、人(他国)がどうするかを見てからでないと対応できない、そうした人間を育ててしまうことになるのではないか。いや、今までそうしてきたから、今のこの国の状態を生んでいるのではないか。

これは、学校ばかりでなく、各家庭そして社会の問題でもある。大人が子供に向き合う、その向き合い方の問題である。